The Bamboo Shoots

～地方季刊新聞～
大和高田・リズモー都市友好協会 発行
2014 年　秋・冬号

No.164

連絡先：大和高田・リズモー都市友好協会
TEL：0745-22-1101
http://www.city.yamatotakada.nara.jp/lismore/

このバンブーシューツ（筍）が、大和高田市とリズモー市の情報交換に役立つ立派な竹に成長しますように

やまとたかだ元気ウィーク

平成 26 年 11 月 8 日から 16 日の「やまとたかだ元気ウィーク」の期間、市内各所で様々なイベントが行われました。11 月 15 日（土）は、JR 高田駅東広場で「未来は元気フェスティバル」が行われ、全国のゆるキャラたちが、大和高田市マスコットキャラクター「みくちゃん」のために集合しました。ご当地キャラのステージショーや、グルメ・うまいもん市などがあり、たくさんの人で賑わいました。大和高田・リズモー都市友好協会も「リズモー物産展」としてブースを出展し、ラミントンとマカダミアナッツ、ポップコーンを販売しました。当日は、平成 26 年度の派遣学生たちも、朝から手伝いに来てくれました。学生たちの元気な呼びかけで、ブース周辺には、たくさんの人が集まりました。用意したラミントン 300 個は、夕方までに完売しました。日本ではあまり知られていないラミントン、購入したお客さんたちから美味しいと、好評を得ました。

元リズモー市長の孫、2015 年度オーストラリアデイ大使に

2015 年度リズモー市オーストラリアデイ大使に選ばれたと発表されたクレイド・キャンベル氏は、かつてのリズモー市長の孫で、「シェイク・イットアップ・オーストラリア財団」を設立した人物です。クレイドの名前は、1956 年から 1966 年までリズモー市長を務めた祖父であるクレイド・キャンベル氏の名前から名付けられました。アルダーマン・キャンベル氏は、1963 年に大和高田市との姉妹都市締結を行った市長であり、初めて日本に渡り友好を深めた人物でもあります。

その孫であるクレイド氏は、シドニーで事業を成功させ、また 44 歳のときにパーキンソン病の診断を受けた人物です。60 人の従業員を抱える機械設備や、ロボット技術の会社を経営し、会社の経営と並行してパーキンソン病に対する知識を深め、「シェイク・イットアップ・オーストラリア財団」を設立しました。

「かつての市長と同名のお孫さんに、オーストラリアデイアワードを授与させていただくことは、私たちにとってこの上なく光栄に存じます。リズモー市にとっても、キャンベル家にとっても、特別な瞬間になると思います。」と現市長ジェニー・ダウェル氏は記者に答えました。

「クレイド氏の生き方は、人々にとって一つの勇気や決意になります。どのように人生を歩んできたかは、式典の日に話してくれるでしょう。わたしは、個人的にクレイド氏と面識はありませんが、彼のことを聞いていると、おじい様の先駆者としての精神や、新しいことを恐れず、前向きに取り入れ取り組む姿勢は、孫である彼にしっかりと受け継がれているように思います。」

「クレイド氏にお会いできることが今から楽しみでなりません。おじい様の想いがつまったリズモーを彼に案内すること、特に去年除幕式を行った姉妹都市 50 周年の記念碑を見せることが楽しみです。リズモー市と大和高田市の姉妹都市締結は、日本とオーストラリア間で初めて結ばれた姉妹都市の絆です。かつての市長クレイド・キャンベル氏の先見の明があったからこそ結ぶことができた友情だと思います。」

クレイド氏は、ニューサウスウェールズ州で電子工学実習生としてそのキャリアを歩み始めました。その後実習生からシドニーにある株式会社自動操作機械＆ロボティックスの CEO にまで登りつめました。2009 年、社内でのプレゼン中に、ノートを持つ左手の震えに気付いた直後、パーキンソン病だと診断を受けました。症状が進むにつれクレイド氏は、世界中でパーキンソン病に対してどのような治療が行われているのか学べる限りの知識を学びました。そして 2011 年、3 人の子どもの父親である氏は、「シェイク・イット・アップ・オーストラリア財団」を立ち上げました。ミシェル・ジェイ・フォックス財団の協力のもと、パーキンソン病に対する新たな治療法の確立、オーストラリアにおけるこの病気の認知度向上、治療法を見つけるための寄付をつのる活動に力を注ぎました。

オーストラリアデイとは
1788 年のオーストラリア大陸発見を記念して、毎年 1 月 26 日に開催される、オーストラリアの「建国記念日」ともいえる重要な祝日です。色々な場所でオーストラリアの国旗が飾られ、花火があがったり、パレードを行うなど、国全体がお祝いムード一色になります

報　恩　講

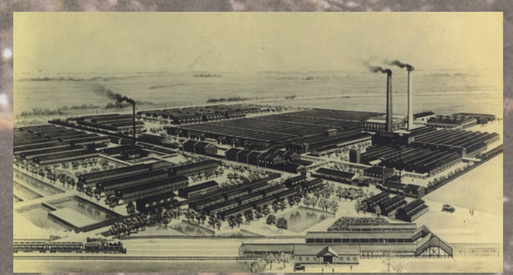
大和高田市内の歴史ある専立寺にて、11月16日の日曜日に、報恩講の集いが行われました。報恩講とは、仏教の浄土真宗という宗派の大事な行事です。信者達はこの行事を行うお寺の準備から参加しました。本堂の装飾品に磨きをかけピカピカにし、本堂や周辺のお掃除をします。住職を中心にこの日を迎えるため、みんなが団結してお手伝いをしました。当日、お経をいただくのに、他のお寺からたくさんの住職たちも来て、賑やかにとりおこなわれました。お経だけでなく偉いご住職を招いて皆で話を聞き、心を休めるひとときをもつことができました。また、「iroha」というグループのミニコンサートも行われました。二胡（中国）・ピアノ（洋楽）・尺八（邦楽）の美女３人の世界平和を願う演奏でした。優雅な音楽に耳を傾け、心癒されるひとときに世間の雑音を忘れ、みんなが笑顔になりました。

成　人　式

1月の第２月曜日は「成人の日」という祝日で、多くの市町村で「成人式」が行われ、新成人を祝います。日本では、20歳以上を「成人」と定めています。成人の日は「おとなになったことを自覚し、自ら生き抜こうとする青年をはげます」ことを趣旨とし、1948年に制定されました。この日は、大和高田市でも「成人式」が行われ、市長から祝辞が贈られました。今年の新成人は、791名で、代表が成人として社会の一員となることを誓う挨拶を述べました。

大和高田ブランド　さくらコットン

雨量の少ない大和盆地にある大和高田市では、江戸時代に稲作と交代で綿を栽培し始めました。大和木綿が全国で評判になり、染色加工技術も発達しました。明治時代には紡績工場が建ち賑わいました。しかし、オイルショックや繊維製造業の海外移転などで、1977年には紡績工場は閉鎖され町は少しずつ衰退していきました。今では、大和高田に江戸時代に栄えた大和木綿に関するものは、ほとんど残っていません。大和高田商工会議所では、地域活性化を図るために、町の歴史を学ぶことから始め、町が発展してきた陰には綿があったことを改めて知りました。そこで、シンボルとして綿畑のある風景を再現するため、2007年から商工会議所が苗や種の配布を始め、大和高田市やその周辺で栽培が復活しました。昔ながらの農法で「安全・安心」を追求し作り手の顔が見える綿の有機栽培に成功しました。綿を作るだけでなく2011年から、これを利用して何か商品を作れないかとプロジェクトを推進しました。老舗のニット会社やメリヤス産業を担っている会員の協力を得て、国産綿から国産綿糸、国産製品を市内で作り上げることに成功しました。綿は、化学処理を一切せず加工され、手作業の繊細な縫製で赤ちゃんのパジャマやズボンなどに仕上がります。戦後、市内を流れる高田川沿いに植えられた桜並木は高田市民の誇りで、市民にとって勇気と優しさのシンボルである「さくら」から、「さくらコットン」と名付けられました。2013年６月には京都伊勢丹で販売され、国産有機栽培綿のベビー服は、大変人気で、肌に良い物が求められています。単に産業の発展だけでなく、繊維の町として発展すると共に、自信と誇りを持って大和高田の名を知ってもらいたいです。



大和紡績工場を受け継ぎ、周辺産業を育み支えた大日本紡績高田工場
辰野金吾の設計によるレンガ造りのモダンな工場でした